

「ムラ」と「トカイ」のアイデンティティー

民俗学から考える

人間というものは、少しずつ歳をとると、つい「昔は○○だった…。」などと言うものである。私もこの年末年始に久しぶりに郷里に帰ったのだが、インフラ用道路の相次ぐ建設や、公立の大学キャンパスが近くに出来たりして、街の景観がものすごく変わってしまっているのに驚いた。

その上、最近はケーブルテレビやら、電子マネーの導入（と言つても、これは試験的なものらしい）も始まったそうで、田舎もずいぶん様変わりしたものである。

そこで開口一番「十年前はこんなになるとは思つてなかつた。」と親に話すと、「普段都会で生活しているくせに、なんだ」と、一蹴されてしまったのである。

確かに普段から情報や文化の中心に住み、たまにその喧騒を逃れて田舎に帰れば、またそこも近代化の波に覆われていた、などと嘆く心境は全く矛盾した話ではある。しかし幼少の頃親しんだ風景や、環境が変わっていくのは一寸寂しい。

そして、最近の若者は方言を使わなくなつた、などという話をきくと、なにか無性に腹が立つてくるのである。

かつてはあれほど嫌っていた田舎言葉にさえ愛着を感じるというのは、歳を取って保守的になってきたのかとも思ふが、確実に変化する時代の流れ、——大量生産・大量消費の価値が、許容を超える廃棄物を生み出している現実や、コミュニケーション不全の社会——に少なからぬギャップを感じていると言えば、取り敢えずは面目を保てるだろうか。

一般に都市や農村という共同体が、なんの歴史的経緯を持たず固有に存在する筈はなく、他者からの不断な干渉も含め、さまざまなコミュニケーションの行為の所産であることは明らかである。自分の意志とは関係なく、一地方都市の片田舎に生まれ、自我を形成してきた「わたしの原点」と言うと、少し語弊があるが、都市と農村、世代間のカルチャーギャップなどが最近問題になってきているだけに、ここで取り上げる意味はあるのではないかと思っている。

それでと言うわけではないが、つい最近『精霊の島』という映画を観て感銘を受けた。なぜかというと、一つには自分のアイデンティティの育まれた社会としての地方の共同体が、異文化によって混沌（khaos）に陥つていく危機感が、この映画でも共有されているからであり、さらにその危機と感じられた異文化をも取り込んでいく「時代の文明化作用」とでもいうべき新たなる価値というものが、果たして存在し得るかを問題にしていて、少なくともその発想に共感したからである。

文化人類学者・今福龍太の言葉を借りれば、「自己の中を越境すること。自らの土地へのイミグレーション（Immigration＝移住）をこころみること。」そうした行為の果てに、わたしたちは固定的で同質的な「場所」や「文化」のロジックから自由になった、ヘテロ（hetero）なものが共棲する一つの新しい認識の風景を手に入れることができるのである。」（青土社刊『クレオール主義』P101）ということだが、「理想の」ないしは「古き良き」時代への回帰を夢想するノスタルジーを超え、新たなる社会の価値を創造すると言つたら少し表現が過ぎるだろ

うか。

アメリカニズムのもたらしたもの

この映画『精霊の島』の舞台は、一九五〇年代の北欧アイスランドである。第二次大戦の傷跡も癒えない首都レイキヤヴィークでは、戦禍で家を奪われた人達が、真冬には氷点下になる（日本の秋田ほどだという）気候条件の元、アメリカ軍の残したバラックで生活している。

精霊の存在を信じるカロリナの一家は、四世代の大所帯であり、彼女の娘ゴゴが米軍の将校と結婚し、アメリカに旅立つ所からこの物語は始まる。

ゴゴには三人の成人に達した子供がおり、そのうち長男のバディは母親にべったりである。そのバディが母親の後を追いアメリカに渡り、エルビス張りに、いかにも「アメリカナイズ」されて帰ってくるに及んで、静かだったこの町が、俄然慌ただしくなってくる。

アイスランドの荒涼とした風景には凡そ似つかわしくない、アメリカ製のフォードを乗り回し、タバコを息付く間もなく吸い続け（とはいってもこの一家は後述する対照的な二人を除いて、みなベビースモーカーだ）、コーラをこよなく愛するバディは、まさにアメリカニズムの洗礼を受けた世代の代表である。

彼の目に映る故郷の生活は味気なく、退屈でしかたない。故に近所の悪ガキとつるんでは、夜中までドンチャ

ン騒ぎに高じる毎日だ。

一方、カロリナの夫トマスは勤勉な港湾労働者であり、バディの弟で孫に当たる内気なダンニとともに平穏で静かな暮らしを望んでいる。「古き良き」時代の擁護者と、大衆消費文化の代表が、同じアメリカ軍のバラックで生活しているという風景は、さながら風刺絵を見るようで滑稽である。

レイキヤヴィークのはずれのバラックは、都市の住民からみれば辺境の地だ。周囲から奇異の目で見られ、只でさえ孤立しているというのに、バディの行動によって住民相互の人間関係もぎくしゃくしたものになっていく。共同体の不協和音とでも言おうか。

しかしそんなバラックにも確実に時代の波は押し寄せる。公団アパートが建設されはじめ、バラックを後にする家族も出てきた。アメリカのゴゴからテレビも届けられる。

飛行機パイロットになつた自慢の孫ダンニも事故で亡くし、トマスにとって失意は深まるばかりだ。しかし彼は復興の兆しにも、バディの横暴な振る舞いにもじつと耐えているかのようだ。

そんなトマスにとって唯一の救いは、曾孫に当たるボボとの交流である。トマスにとってボボの存在は、次の世代への期待と希望に満ちているのかもしれない。

そしてラスト、精霊によってオペラが口ずさめるようになつたボボに見送られて、港湾へと向かうトマスがチャップリンのまねをしてスクリーンから遠ざかって行くシーンには、哀愁とともに、一つの時代の終焉を見るような気がした。

トマスは、バディが体現するアメリカニズムに、精霊（つまり悪魔と言うことか）としての嫌悪感を感じていたのかも知れない。しかし同じように精霊からの贈り物ボボに未来への希望を託していたのではないかと思うのである。

近所の田圃や畠が買収されて、便利なアクセス道路が建設される。商店ではキャッシュレスで買い物ができる。確かに時代は確実に変化している。しかし山肌から土を奪い、無尽蔵に建設されるハイウェイの行き先はどこなのだろうか。はたまた、人々のコミュニケーションを奪い、おまけをしてもらったり、まけてもらうということがまかり通らない、人情の通わない打算的な商品経済の目差すものはいったい何なのか。

まさかそれが理想社会なんて筈はないだろう。しかし確実に時代は巡る。だから問題なのは、その中でどのよう生き、未来に希望を託していくかということになる。

「ムラ」の思想史

私が育った六〇年代は、ちょうど高度経済成長期であり、私の前の世代から見れば、いま私が感じているであろう、同じような（いやそれ以上の）郷愁を当時感じていたのかも知れない。なぜなら東京オリンピックを前後して、溢れ帰る近代化の波が、日本の至る所を覆っていたからである。

私の田舎もまた例外ではなかった。ここでは一山村の民俗史を綴った、後藤総一郎著『遠山物語』（ちくま学芸文庫刊）を手がかりに、アイデンティティーの揺らぎについて考えていきたいと思うが、この本の舞台は私の両親の郷里であり、度々訪れたことがある親和的な場所でもある。

この「遠山村」と言う地名は、現在日本のどこにも存在しない。正確に言えば長野県南信濃村というのが正

式な名称になる。

日本地図を開くとそのほぼ中央の、東経一三八度のところを、諏訪湖を起点とした天竜川が雄大な流れを形成している。その流れに沿って飯田線というJRの在来線が伸びているのだが、その中間あたりの平岡と言う駅の、さらに北東に十キロほど山道を進むと、昔から「遠山」と呼ばれてきた山里、南信濃村がある。

南アルプスの深く険しい山々に周りを取り囲まれた、自然豊かな土地柄なためか、人々相互の結びつきも強く、人の情けが身にしみて感じられる場所だ。

因みに私の父の実家は、一九六一年に起きた水害、いわゆる「三六災害」によって押し流されてしまい、今は見る影もないが、幼少の頃この地に訪れた際には、叔父さんの家で大層もてなしてもらった記憶がある。

また、冬には「霜月祭」と呼ばれる大祭があり、全国から多くの観光客が訪れる。本の著者である後藤氏も述べているように、この祭りは「遠山共同体の最も貴い構成部分であり、生活であり、政治であつた」(P27)と言われるが、私も訪れてみて山里の共同性というのはこのようにして培われるのかと、つくづく実感させられる。

後藤氏もこの「遠山」の出身で、この土地の『郷土史』の編纂にも関わっている。そのため、ことさら思い入れも深いのか、「遠山」の地名について、それが「南信濃村」に地名変更されるのは、村人が「辺境」とか言われるイメージを嫌ったからで、歴史ある地名が消えてしまったことを、村人の「感性の不幸」だと、まるで我が事のように嘆いている。

ともあれ、山里の郷土史を通じて、個と共同性「がど」のように形成されていったのかを問題意識とする後藤氏にあつては、柳田国男や新渡戸稻造に強い影響を受けつつ、それが翻っては自分の自己認識であると述べる。

本編でも触れられているが、柳田国男は『北小浦民俗誌』という著のなかで、「北小浦という小さな部落がわかれれば佐渡がわかる、佐渡が明らかになれば日本が、そして人類史が理解可能」(P26)だとした。このようなモ

デルケースを普遍化する発想は、明らかに帰納法的であり、私としてはあまり頷けるものではない。

本来、自分のアイデンティティーを廻行していくとする後藤氏の発想は、柳田のそれとは別のはずである。だから私は、彼が殊更に柳田を引き合いに出しながら、「遠山」を普遍化していくとする姿勢には、その感情とは別に賛同できないものがある。

例えば「ムラの近代化」と題された章で後藤氏は、「昭和二〇年代」後半以降「水と火」が自給自足から現金購入へと切り替えられていった経緯を捉えて、「つまりこの“文明”を受け入れたことによって、急速にある変化をとげていった」(P325)と言う。

“ある変化”というのは、言うまでもなく購入するための現金を稼ぐという行為のことである。

後藤氏はその変化を、家々のかまどから立ち上る煙に喻えて“ムラの香り”が消えたと表現している。「“ムラの香り”とは、共同体としてのムラの香りである。その“ムラの香り”が消え、その風景が消えたことは、共同体としてのムラが崩壊してしまったことを意味したのだった。」(P328) というのだが、彼が言うように「資本制の論理の浸潤」によって、共同性豊かな「遠山」の人々の暮らししが破壊されてしまったと言うなら、その元凶である資本制の解体を目指すというのがその答えになってしまふのである。

現に氏は六〇年安保闘争をその先頭で闘い、その歴史的位置を「不滅である」(P340)と論じている。もちろんその意義について、私は微塵の異論もない。

しかし発想の在り方として、固有の歴史を持つ「遠山」の理想的なコミュニティーを、理念として守ろうとするのでは、次の世代に対して明るい未来を展望していく」とはできないのではないだろうか。

私としては、失われゆく郷土の財産に想いを馳せる氏の思いには共感するものの、なにも「資本主義の不幸」などと言わなくとも、「遠山」の美しい自然や、貴い文化財を末永く残していく必要を訴えればそれでいいので

はないかと思う。

その意味では、「遠山」の豊かな森が、明治時代以降、本土資本のもとで大規模に開発された歴史について、もっとと目を向ける必要があるのではないか。そこでは豊かさの代償として、大量の木材が伐採されたために、住民に度重なる水害がもたらされたのである。

潰えゆく「遠山」文明の荒廃を嘆くよりも、被害を受けている現実に向き合う事が大切なではないだろうか。ゆえにその開発の思想にこそ批判のメスを入れていかなければならぬと思うのである。

ムラにおける開発

「山のあるところには谷がある。谷のあるところには川がある。そして川があればその氾濫によつてもたらされる”水魔”との闘いの歴史が刻まれている。」(P349) と後藤氏は割と”サラツ”とこの事について書いているのだが、なぜ川があれば氾濫するのかという訳については、そんなに”サラツ”と見過ぎす訳にはいかないだろう。

もちろん台風などの自然災害は予知しようもないし、避けられるものではない。しかしそれが人為的な原因で被害が拡がってしまったとなれば話は別である。

「明治二九年」(一八九六年)から二十五年の間「遠山」に入った王子製紙は、千五百人もの山林労働者を入山させ、遠山の共有山林を大量に伐採した。

その影響もあって、翌年には早くも大水害による被害が報告されている。元々山間の河川地帯であるため害を引き起こしやすい地形であったのだが、人為的な開発によって被害に拍車が掛けられた事は否定できない。また、それをさかのぼる江戸時代においても、徳川幕府への年貢として住民によって木材の伐採が行われていて、享保年間に起きた度重なる大水害などはその因果関係を改めて捉え返しておかなければならないだろう。いずれにせよ、『水魔』と呼べる半分は人間の所業にあり、後藤氏の表現に敢えて付け加えさせて貰えば、「ハマ」ならぬ「ヤマ」の『魔人』の仕業だと言えよう。

おまけに、一九五〇年以降にあっては四年に一回の割合で水害が起こっており（前述した「三六災害」もこれに含まれる）、「遠山の戦後史を振り返るとき、この『水魔』によるムラの破壊とその再建というまさに「土木政治」の繰り返しにあけくれてきた」（P31）のだという。経済的に困窮した村人の中には、工事を期待してか「また台風が来て堤防でも流れないかなあ」とか言つたとか言わないとかいう笑い話もあるそうだ。とても私は笑えないが…。

宮崎駿の映画『もののけ姫』には開発の象徴としてエボシ御前達のすむ『たら場』が描かれていた。もちろん『シシ神の森』のような恐怖すべき手つかずの自然なんてこの地球のどこにも存在してはいない。ましてや『遠山』の自然は人間の手すでに荒らされてしまっている。だから私たちは、少なくとも災害のない『遠山』にすべきだし、自然と調和したライフスタイルを考えなければならないだろう。

箱庭の自然に癒しを求める若者や、都会でガーデニングに精をだす奥様には、是非理解してもらいたいものだ。

文化的に“混血”であること

そして再び田舎でのお話。そもそも私が田舎を飛び出したのは、都会に文化を求めてと言うと聞こえはいいかも知れないが、実はお恥ずかしい話、町に映画館が無くて大好きな映画が観られないという、素朴でものすごく単純な理由による。

だから都会に出て来て、その大好きな映画をたくさん観ているのかといえば、別にそんなことはないわけで、却ってたまに帰った時に車で隣町に出かけ、まとめて観るほうが圧倒的に多い。その上前述したようにケーブルテレビなどがあるおかげで、都会に住むのと全く変わらない生活が送れてしまうのだ。

母親も「昔、あんたが不満だったものは全部あるでしょ」と言う。ほんとにその通りだ。だから帰ってこいというのがいつもの親の常套手段ではあるのだが、二十歳そこそこの当時の私ならいざ知らず、「都会に住む田舎者」として主体形成してしまっている以上、もう元には戻れないのですよ、と言いたい。

それはともかく、一般に「田舎」と「都会」という二項図式が成り立つには、ある契機が必要である。田舎はあくまで文明と対極であり、都会はそれを体現するものであると。少なくとも私は幼少の頃からそう思い続けてきた。だからこそ私は都会を志向したのであった。

しかし今やその契機は存在意義を失ってしまった。これは実に嘆かわしい事なのだろうか。
いや、そうではないだろう。

考えてみると、都市だとか農村だとかいう境界さえ曖昧になっている現在、私のような地方出身者や外国人

労働者が集まって、有機的にコミュニティを形作っているのが都市という空間の実状ではないのか。

ちょうど乱暴な言い方だが、田舎者のくせして、都会に出て来てしばらくすると、「やっぱり田舎はいいよな」なんていう思い上がりは、そのままストレートに“守るべき田舎”（＝自然と置き換えても良い）という図式で、自分を離れた理想の田舎を愛するようになるのだ。

もちろん自戒も含めてだが、私としてはそのような「ふるやと創生」がいかに無意味かを自覚するところから、環境や人権に対する関わりを立ち上げていかなければならぬと思っている。

蛇足ながら私の田舎では、ブラジル人のコミュニティーがあり、年に一度の“サンバ・カーニバル”を彼らと共に町ぐるみで盛り上げている。まだまだ法整備の上で「国境なき社会の実現」という訳にはいかないが、人種間の障壁は徐々に取り除かれてきているし、何よりもみんな愉しそうなのがいい。

最後になるが、二十一世紀に向けて環境問題や民族紛争の問題など山積する課題を前にして、私たちに課せられた責任は大きい。理念としての調和はともかく、自然と親和的でコミュニケーション豊かな社会を、何よりも現実の営みの中で考えた時、「持続可能な社会」の具体像も見えてくるのかも知れない。

私という「都会の田舎者」としてのアイデンティティーも、こうして日々再生産されていくのである。

（1998.12）